文学部

自己点検・自己評価つれづれ話

文学部
倫理思想史講座
弘　睦夫

大学の自己点検・自己評価という言葉がしきりに耳につきだしたのは、いつごろからのことであろうか。手元にある大学教育研究センターの資料をみると、ここ五～六年のことであることがわかる。センターでの一九八九・九〇年度の研究員集会の統一テーマが自己点検・自己評価の問題であったことも思い出されるし、センターの刊行物を見るといかに意欲的に研究に取り組まれたかがよく理解できる。しかし同時に思い出されるのが、研究員集会に参加したときに感じた参加者の奇妙な冷淡さの記憶である。自己点検・自己評価の重要性、必要性についての正面からの反論は、当然のことながらないのであるが、ではその積極的な意義を認め、積極的に取り組むのかといえば、全体の雰囲気はそれから程遠い何とも奇妙な感じをもったものである。われわれの文学部でも、先日の『広島大学白書1』の完成を承けて、文学部の白書がほぼ完成の段階にきている。そして、その過程で私が感じたのが、さきに述べた違和感であり、何とも奇妙な落ち着かない気分である。なぜこんなことになるのであろうか。ここで私が試みようとしているのは、自己点検・自己評価についてのある種の自己点検であり、自己評価である。それはまた、編集部の要求されている裏話、こぼれ話として受け取られてもよい。

自己点検・自己評価という言葉を聞いたときにまず私たちが連想するのは、古代ギリシャのデルフォイのアポロン神殿壁に刻まれていたといわれる「汝自身を知れ」という格言ではないであろうか。どんな言葉も両義性をもつが、今世紀のある文人は次のように書いている。「汝自身を知れだって。実に有害で嫌な格言だ。自分を見つめるような奴は、発展が止まってしまう。青虫が自分をよく知ろうとすれば、決して蝶にはなれないだろう。」これは、この文人独特の皮肉に満ちた表現ではあるが、私自身長年の間、学生に向かって「決して自己評価するな」と語ってきている。それは、口にするのは容易だが、正確に完全に自己評価することが、原理的に不可能であると考えているからである。下手に自己評価すれば、なけなしの才能までもつぶしてしまうことになるだろう。自己評価とは、失敗を繰り返す中で、また他の人々との交流の中で自ずと出来上がっていくものである。本当の自己評価は、死んだ後のことにしてよいのではないだろうか。

とはいえ、自己点検は無条件に必要なことである。しかしそれが、自らが自らのために、今後の発展を目指して行うものならば、徹底的に内発的なものでなければならないのは当然のことであろう。現在の自己点検の作業の中で多くの人が感じている疑念の一つは、明らかにこの点にあると思われる。自己点検がよりよい大学を目指してなされるのなら、何もここ数年間のように一斉に行われることはないはずである。お題目はともかく、不十分ながらも、研究教育の改善の努力は、これまでも持続的に行われてきたのではないであろうか。またその結果を公表することは、利点はあるとしてもあくまで副次的なことである。しかも公表された白書が、行政上の優遇措置などにつながるとすれば、行政管理的にはともかく、研究教育の改善に結び付く望みははかないものになってしまうであろう。

別の面からみれば、自己点検でもっとも必要なことが、現状の中での欠陥・失敗の認識であり、それへの対策を講じることであることは自明のことである。確かに成功した面をより以上に発展させることも必要だが、失敗から学ぶことの方が教育研究の場ではより重要であることの認識は大切である。それならば、極端な表現になるが、自己点検・自己評価のすぐれた白書は、欠陥と失敗の集大成となるべきではないだろうか。別に失敗に対して報償制度を設けよというわけではないが、失敗を大切にしない自己点検は、容易に表面だけを取り繕った自己宣伝や自己美化に終わることを十分に考えておくべきである。